図書館に潜む悪魔

人物紹介

私……主人公。30歳くらいの男性。「ゴーストハンタ」の一員。

相棒……私の相棒。同じく「ゴーストハンター」の一員。

少女……私立若葉学園の図書委員。不幸にも事件に巻き込まれる。

独白、無意味な文章の集合体

何から書き始めればよいだろうか。一般に3年以内に命を落とすといわれているこの業界に身をおいてから既に6年ほどたつだろうか。そのなかでもこの前の事件は特に悲惨なものだった。

傍らにおいてある五芒星にそっと触れる。長年の使用からか、一端が欠けてしまっている。

筆を取りたいが、どうしてもこの前の事件のことを思うと相棒のことを思い出してしまい、その思考を無意識のうちにシャットアウトしてしまう。気分転換に湯を沸かし、インスタントコーヒーを入れる。部屋が暗くなってきたので、電気をつけることにする。わたしが今座っている机と、あとは簡単な食事が作れるテーブル以外には小さめの窓しかないこの部屋がパッっと明るくなる。たった８畳程度の部屋だが、私にはこれで十分だ。そろそろ家族を作らないといけない歳だろうか。

そんなことを思っていると湯が沸いた。インスタントのブラックコーヒーにそっと口をつける。

熱ッ、私は猫舌なのに入れたてのコーヒーをすぐ飲むなんて。全く、どうにかしている。

さて、続きをかいていこうか。どこまでいっただろうか、いや、まったく殆ど何も進んでいないではないか。むしろ凡そ必要のない文章しか書いていない。まあ取るに足りない私の生涯を残すという意味では、このような無駄な文章もそれなりに意味のあるものかもしれないが。

そうだな、相棒との出会いは……やはりこの前の事件から書いていこうとしよう。

「ここなんだな」
　路肩に車を置き、相棒に語りかける。
「敷地内から、やつらの反応がします。どうやって入りますか？」
「正面からに決まっている。一刻の猶予もないのだろう」
　車のドアを閉めると、走りながら鍵のボタンを押す。ドアロックの音を置き去りにして校門を抜ける。
「待ちなさい、君たちは一体何なのだね？」
　守衛が私達を静止する。無理もない、必死の形相をした中年２人がいきなり学園内に入ろうとしたのだから。
「私たちはこういうものです」
　その答えを予想していた私と相棒は、偽の警察手帳を守衛の鼻先に突きつける。警察沙汰には巻き込まれたくないのだろうか、一瞬ついてくるそぶりをしたが、それだけで私達を通した。
「そこの茂みを左、通路をさらに左に行った建物内です」
　相棒の誘導に従い、「現場」へ走り出す。幸い夏休みであるため、学園内には人が殆どいない。いるとすれば、運動場で練習している陸上部と野球部くらいだろうか。
　その建物は二階建てであった。明らかに本公舎から離れている。かといって体育館ほどの大きさはない。図書館だろうか。視聴覚室といったところだろう。
　その扉は開いていた。靴箱には一足の靴が入れられていた。見たところ運動靴だ。
「ここの突き当たり、そこからやつらの臭いがします」
　数メートルの廊下を走り抜け、扉を開けようとする。すると、扉が独りでに横に開いた。刹那、何かがぶつかる音とぶちまける音、そして女性の悲鳴。相棒の動きが止まったため、危うくその背中にぶつかりそうになる。
「いったぁ……一体何事ですか」
　相棒の肩越しに何があったか見ると、ひざを立て、尻餅をついている少女がいた。まわりに本が散らかっているところをみると、どうやら本を運んでいたときにぶつかったのだろう。
「申し訳ない、お嬢さん。立てるかい？」
　相棒がしゃがみこみ、少女に手を差し伸べる。困惑しながらも、少女はその腕に引かれて立ち上がらされる。
「あ、ありがとうございます……」
　俯きつつも、少女は礼を言う。
「あなたたちは、一体だれでしょうか。見かけない顔なのですが」
　その声はひどく弱々しかった。
「私たちは古本を回収しにきた業者だよ。連絡いってなかったかな？」
　こういったときの相棒は本当に口が上手い。以前は営業職として働いていたと言っていた気がする。

「ええっと、すみません、ちょっとそのような話は伺っていないです。なにせ、今日は私だけですので」
　すみませんと、直角になるまで頭を下げられる。
　すっと二人の横を通り過ぎ、散らばった本を片付ける。どれもが薄汚れていた。どうやら書庫の整理でもしていたのだろう。少女の服装も、制服と思われるものの上からエプロンをつけている。
　片付けた本を少女に渡すと、またしても深くお辞儀をされてしまった。
　その時、部屋の奥から何かの音が聞こえた。
　相棒に目配せをする、間違いなくやつらだ。

やつらの襲来

「何か今、音が聞こえたような……」
　振り返り、音の発信源に歩み寄ろうとする。その肩を相棒がつかみ、そっと遠ざける。
　身体を突き抜ける違和感、今まで対峙してきたものとは明らかに違う緊張感。埃っぽい部屋を包み込む威圧感。それらが一挙に精神へと負荷をかけてくる。
　ふっ、と少女の身体が横に揺れる。年頃の少女にはこのような場所は似合わない。
「やつを頼む。私は少女を安全な場所まで運んでくる」
　しゃがみこみ、目を覗き込む。それは明後日の方向を向いており、私を見ていなかった。おそらく一時的に自我を奪われたのだろう。
　手首を握り駆け出そうとする、だが、それ以上脚は進まなかった。そこから先に足場がないように、今見ている風景は実は精巧に描かれた写真で、それが壁にかけられているように。
　再び襲う威圧感。異様なものと対峙するときにこみ上げてくる恐怖感。
　懐に仕舞っていた五芒星を取り出し、それを少女に握らせる。すると、少女の目に正気が戻った。
「なに、これ。ひどく、怖い……」
　身体を私に預け、腕を回し抱きついてくる。巻き込まれた少女には悪いが、この状態ではどうしようもない。
「悪いが、代わりにこれを抱きしめてくれないだろうか」
　ゆっくりと、優しく話しかける。少女は頭を上下させ素直にも私の指示に従った。
「先輩、これは結構なつわものですよ」
　五芒星を突き出しながら頭をこちらに向けて話しかける相棒の声色は、珍しく震えていた。
　あたりを占めていた重圧が一点に凝縮していく。
「どうやら、これ以上は待ってくれないようだな」

脅威

　それはあまりにも醜悪だった。かろうじて人型を保っているが、全体的に霞みのようだった。全長は２m程度だろうか。明らかに身体には悪そうな、毒々しい色をしており、事実あたりに卵が腐ったような異臭を振りまいていた。口とおぼしき器官からは耳にするのも苦痛なひどく調子の崩れたオルガンのようなうめき声が聞こえた。
　対峙したときに私の身体を恐怖が駆け抜けた。まるで蛆虫が全身を撫で回すような不快感。耳をふさぎ、しゃがみながら奇声を発したくなる衝動に駆られる。それらをぐっと奥歯をかみ締めて押し殺す。精神の拠り所は少女にある。もしも少女がそれをなくしてしまうと、その瞬間に精神が悲鳴を上げ、自らの首を絞め殺してしまうかもしれない。
　懐からボールペンを取り出し、それを左の手の甲に突き刺す。鮮血が流れ出す。痛みとその光景のおかげで何とか気持ちが和らいだ。
　やつらはどうやら１体だけだった。
　おそらく腕に当たる器官を振り上げる。周りの本がまるで糸で引かれるように浮かび上がる。
　振り下ろされる多数の本。２，３言葉を紡いだ後、私は２人を庇うように前に出て右腕を突き出す。まるでそこに何かがあるかのように本たちが左右に分かれて次々と後ろにぶつかった。
　相棒が走り出し、それに五芒星を突き出そうとする。刹那、それが霧散した。次の瞬間、全く離れたところに再びそれが集合した。そのまま身体の一部をもってして相棒に殴りかかる。彼は飛ばされ、その勢いのまま本棚にぶつかる。
　再び襲い掛かる大量の本たち。咄嗟に腕でそれらをガードする。紙が鋭利な刃物となり、私の着ていたコートを切り裂いていく。防刃製であるため、皮膚はおろか下に着ているシャツも多分無事だろう。最も、露出している手は守れないが。
　２０秒ほどの詠唱が終了したのち、対象を視界に捉え完全不可視の剃刀を走らせる。霧の破片を削ぐことは出来たものの、殆どダメージは通っていなかった。
　それがうめき声を発する。鼓膜を振動させることなく、直接脳内に響きかける。
　深淵から数多の腕は這って出、私を引きずり込もうとする。落ちていく最中、真っ暗な空間がまるで質量を持ったかのように私の皮膚を覆う。べっとりとした、タールの海におぼれていくかのような感覚。身体から力が抜け、自由落下に身を任せる。そのまま地面に叩きつけられ、一瞬のうちに頭蓋骨が割れる。あふれだした脳漿の海に、歪な、ありえない方向に曲がった腕や脚が沈み込んでいく。動かない眼球を通し、光の差し込まない、底を、哀れは成れの果てを知覚する。

身体を襲う鈍痛により意識が回復する。

背中が痛い、どうやら私も相棒と同じく叩きつけられたのだろう。胃液が逆流し、口の中を異臭と不快感が満たす。横に視線を向けると、少女が恐怖のまなざしでそれをみていた。私に視線を移すと、一瞬ではあるが、心配するような表情をしたものの、すぐに恐怖心に塗り替えられていく。

ふらつきながらも立ち上がる。私に迫ろうとしていたそれだったが、相棒が身体全身でぶつかり、倒した本棚が身体を掠めたためか、視線が私から離れる。その隙に次の詠唱を開始する。

少しの間言葉を呟いた後、何か空気の塊のようなものが私の頭上に出現し、それがそのままそれに向かっていく。周囲に及ぼした影響でしか認識できない塊が、数多の本を巻き上げつつそれにぶつかる。あまりの勢いで塊は消滅したが、それは私とは正反対の方向に飛ばされていった。

相棒が唇を動かし、何かを唱える。そのあと両の指に挟んだナイフを投擲する。暗い部屋に突如放たれた数本の銀色の線。それがぬくりと立ち上がり蝿でも叩き落すかのように旋風を巻き起こすが、線は有り得ざる不規則で直覚的な軌道を行い、無慈悲にも、ただそうすることが宿命といわんばかりに一本残らずそれに突き刺さる。実体のないそれの身体を瞬時に突き抜けるが、体積は最初に対峙したときよりも幾分小さくなっていた。

それ以上に私の消耗は大きかった。放つ呪文はそれぞれが普通の人間なら瀕死、悪くても気絶には追い込むことのできる品物だ。それを、あまりにも巨大な威圧を放たれるこの空間で連発しているため、抜けていく精神は尋常なものではない。まさに気力だけで立っているといったところだろう。

左手を袈裟懸けに振り下ろす。辺りを浮遊していた剃刀が今度こそ、それの左腕にあたる部分を抉り取った。

「清めのナイフを、止めを刺す」
　掠れながら発した言葉ではあったが、どうやら相棒には通じたようだ。懐に手をかけて準備を始める。
　幾らか動きが緩慢になりつつも、三度突撃してくる。それが眼下に迫ったところで、急に動きが止まった。背後に目を向けると、類人にも似ているが、どことなくタコを彷彿とされる顔が浮かんでいた。そいつが蓄えていた触角とも触肢ともつかない何かが巻きついていた。その巻きつきが強くなり、動きが完全に静止した。
　相棒が、懐から取り出した純金で出来たナイフを一振りする。その一撃はこれまでのなかで最も強大で、あまりにも呆気なく身体を分担させていた。
　そこで油断してしまったのが運の付きだろうか。それともそうなるのは必然だったのだろうか。私の身体が一瞬揺らいでしまった。その影響か、それとも実はそれは意外にもまだ力を蓄えていたのだろうか、自分の抗い難い運命に、それでも無様にも抵抗するために腕を変形させた。その先端は鋭く、鋭利であらゆるものを突き刺して尚、まだ満足出来なさそうなおぞましい気配を纏っていた。
　そいつが私に向かってまっすぐと迫っていく。一瞬の光景。時間にすることも難しいような、それほどの短さ。もしも私が意識をしっかりと確立出来ていたのであれば、変形したそのときに対処することも出来ただろう。しかし、現実はそうならなかった。神が私に試練を与えたのか、それとも私の実力が足りていなかったのか。突き刺そうとするそれをかわすことなど不可能だった。
　ドンッ、と、身体に衝撃が走る。しかしながら私の身体には痛みはなかった。確かに流れているであろう鮮血も感じなかった。それどころか重力に従うように地面に頭をぶつける。そのときに口を噛んだのだろうか、少し血の味がする。だがそれだけだった。
　視線を横に向けると、磔になっている相棒が視界に映った。ごぼ、っと、吹き出る大量の血が地面を赤く染める。私が先ほど口の中を切った量とは比べなくても明らかに異常な出血だと理解できる。
　辺りを制圧していた気配は消えていく。心なしか、部屋が少し明るくなった気がする。それと同時に、血生臭さが部屋を充満していく。

終幕、相棒のその後

　あの後起きたことをただ連ねていくのはあまりにも淡白だろう。なので、結末だけを簡便に記しておく。
　少女はあの事件のせいで精神的に異常をきたしてしまった。異端のものとの遭遇による名状しがたい異様な恐怖心と、目の前で起こったあまりにも悲惨な、人の命を脅かしかねない光景を見たことによる健忘症、肉体は動くものの、思考はままならないといったところだろうか。今は知り合いの精神病棟で過ごしている。幸い当時の記憶は忘れているようなので、後遺症は残らないだろうとのことだ。
　相棒は、残念ながらまだわかっていない。命を落とすことはないだろうが、もうこの業界には戻ってこれないという。致し方ないが、ほんの些細なことで命を失うこともある中、生きているだけでも十分なのかもしれない。
　事件は学園内に不審者が侵入したことになっている。そこで、不審者は暴れ出し、１人は重症、１人は精神に異常をきたした、と処理された。目撃者は少女以外いなかったし、事後処理はあまり手間にはならかなったという話だ。
　私といえば、まあ身体のほうは無事だ。だが、精神が蝕まれつつある。何かが急速に抜け落ちていく感覚。このままだと生きる屍になってしまわないかという恐怖と常に二人三脚の人生。だけど、脚をとめるわけにはいかないだろう。まだ見ぬやつらを滅ぼすため、私の身体を救う為に身を挺してくれた相棒のためにも。

あどがき

製作日数：２日、時間にして４時間
　あとがき・奥付を除く文字数：6103文字
　まさか完成するとは思っていなかった。
　初期のストーリーは書庫にて異空間に飛ばされて戦闘、１体目はナーク＝ティトの障壁の創造で閉じ込め、２体目は星の精の不意打ちで主人公負傷、その後退散の呪文を唱えようと思っていたのに、なぜか違うものが生まれた。どうせ自己満足だからどうでもいい気はするけど。

　読み返してみたけど、これって果たして面白いのだろうか、よくわからない。少なくとも、面白い、とは思えなかった。文章もちぐはぐだし。

　参考にした呪文
被害をそらす/幽体の剃刀/ヨグ＝ソトースのこぶし/無欠の投擲/クトゥルフのわしづかみ/刀身を清める（直接描写なし）

図書館に潜む悪魔

http://p.booklog.jp/book/100744

著者：ハヤト
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tani6722/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/100744

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/100744

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ